



# 瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部  
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

王であるキリスト A年(2023年11月26日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エゼキエル書 34章11—12、15—17節

第二朗読：コリントの信徒への手紙一 15章20—26、28節

福音朗読：マタイによる福音書 25章31—46節

## 王であるキリスト

最初の公会議であるニケア公会議(325年)の1600周年を記念する1925年、教皇ピオ11世(在位1922年—1939年)は12月11日付で回勅を発表し、11月1日の諸聖人の祭日直前の日曜日、すなわち10月最後の主日を「王であるキリスト」を祝う日と決めました。当時は第一次世界大戦後で、無神論や独裁体制などの影響がみられるようになった時代でした。そのような状況の中でこの祭日を定めることによって、キリストこそが人類世界を治める最高の権威者、王であることが示されました。その後、1969年の典礼暦の改定により、終末における完成とキリスト再臨への待望と関連づけて、年間の最終主日に移されることとなりました(中央協議会の解説より)。

### 三つの朗読から

第一朗読では牧者である神さまの姿が描かれます。神さまは牧者です。牧者は群れを養います。同じように神さまは人を養います。牧者は群れのなかの最も弱いものに目を注ぎます。

第二朗読に従えば、王であるキリストは終わりの日にすべてを支配します。その支配はすでに始まっています。が、まだ完成していない、途上にあるのです。さらに注目したいのは、王であるキリストは、父である神にすべてを明け渡すのです(28節参照)。そんな王です。

福音朗読に「来るとき」とあります。王はおいでになる方です。待ちわびるのはわたしたちです。待ち続けるその間に、王の兄弟に対してどのように振る舞ったかが問われるのです。

マタイ福音書24—25章は「終末」、「世の終わり」と関連する箇所です。「忠実な僕と悪い僕」(24章45—51節)、「十人のおとめ」(25章1—13節)、「タラントンのたとえ」(14—30節)、

「最後の審判」(31-446節)と続きます。

今日の朗読箇所は、全体として二つの裁きに分けることができます。

1. 羊飼いがするように、人の子によるすべての民族の選別(32-33節)
2. 王による裁き(34-46節)

今日の福音朗読にある「わたしの兄弟であるこの最も小さい者」(40節)をここに留めてください。

「最も小さい者」とは誰を指すのでしょうか? 使徒たち、あるいは福音宣教者と考える解釈も成り立ちます。つまり、福音を伝えて歩いている人々を受け入れるという意味です。「わたしの兄弟である」という表現から見えてくるのは、王と「最も小さい者」とは同列だということです。そうしますと、王自身が「最も小さい者」になっているという点が興味深いですし、見逃すわけにはいかなでしょう。今日は「王であるキリスト」を祝うわけですから、神の子であるイエスさま自身が「最も小さい者」なのです。

ところで、三つの朗読の中に、主イエス・キリストを指す呼び名が様々に散りばめられています。福音朗読では「人の子」、「栄光の座に着く(方)」、「羊飼い」、「王」、「主よ」、「兄弟(へブ2章10-14節参照)」となります。

第二朗読では「キリスト」、「国を支配する(方)」、「御子」です。

そして、第一朗読では「主」、「牧者」が指摘できます。

牧者、羊飼いであるキリストは、人の子であって、全き人。しかも、最も小さき者にとって兄弟です。この方が王として来られ、すべてを支配します。

わたしたちは王であるキリストのもとに一つに集められます。ですから王は、世界の中心にいるといえます。

## お知らせ

### クリスマスの予定

12月24日(日) 待降節第4主日

ミサ時間: 7時(修道院のミサ)、8時半、9時半

主の降誕の夜半のミサ ミサ時間: 17時、19時、21時

12月25日(月) 主の降誕の日中のミサ

ミサ時間: 7時(修道院のミサ)、10時